

■■■■ 研究班報告 3 ■■■■ Media Studies Working Group

歴史の役割り
～2005年度の活動を振り返って～

武田 知己

2005年度のメディアスタディズ・ワーキンググループは、昨年からの辛亥革命期の中央公論を読む勉強会を継続しつつ、新しく、有志で近代日本の「対外観」と「国内政治」に関する研究会を開始した。これは大東文化大学特別研究費の助成を受けて運営されている研究会であるが（代表者は武田）、その目的は、日露戦争以降、国際国家となった日本の対外観と国内改造の潮流をメディア史以外の分野も含めて、多方面から考察することにある。

本年度は、神谷昌史氏（本研究所準研究員）による浮田和民の研究報告、大木康充氏（同上）による土田杏村の研究報告、松山大学法学部の伊藤信哉氏による『外交時報』の書誌学的研究報告があり、武田が戦前における松村謙三の中国視察に関する報告を行った。

神谷氏の報告は、吉野作造の影に隠れて必ずしも十分に研究されていない浮田の時事評論を時系列でとりあげ、明治・大正・昭和を跨ぐ浮田の言論活動を位置づけようとするものであった。これは同氏の博士論文の一部でもあり、大学人・編集者として捉えられてきた浮田に関するもう一つの見方が提示されるものであった。

大木氏の報告は、在野の思想家・著述家である土田の第一次大戦後の時事評論を取り上げたものである。特に当時の社会改造の潮流の中における土田の社会改造論の特徴を導き出そうとするものであり、同氏の長年の土田研究の新たな展開を示すものであった。近代日本において独特の存在を示す土田の評論活動の広がりが見られた。

伊藤氏の報告は、外交史研究において断片的には利用されてきたが、まとまった分析のない『外交時報』の全体像を浮かび上がらせようとするものである。『外交時報』は、かの『フォーリンアフェアーズ』より創刊の古い外交専門誌であるが、『外交時報』を用いた研究の欠落が、日本外交史研究上の大きな瑕疵であることを実感させるものだった。

これらに対し、武田の報告は人物研究に特化したものであったが、早稲田の学生時代、次いで代議士になる前の松村謙三の二度の中国視察をめぐる未公開資料を用いた分析であり、戦後の日中国交回復の基礎を築いた松村の戦前の中国観に焦点を当てたものである。

これらのテーマを見ればわかるように、この研究会の主たる関心には、当時の日本が持っていた「中国観」の分析がある。隣国の中国が世界の潮流を吸収し、共和国となって強国への道を歩み始めた当時の中央公論の評論を読むこととこの研究会の関心は相互に関係してくる。

しかし、今年一年の活動を通して、当時の日本外交をめぐる情報と他国イメージの相互作用という、もう一つのテーマが浮かびつつあるのではないかと感じている。中央公論や外交時報に掲載された評論の情報源は何だったのか。それが当時の政策実務家が持っていた情報とどの程度の差があったのか。これらは、今回の研究期間では充分には展開できないテーマかもしれない。研究会には、本グループに所属する準研究員を含め、他大学の大学院生や教員の参加もあったが、新しくメンバーの参加を募る予定もある。また、来年度は、別途、詳しい研究成果を公開する機会も模索しなければならない。やるべきことはまだまだあるが実りも多い一年であったといえる。

ところで、これらの勉強会や研究会は、基本的には歴史の実証研究者の集まりであるが、他方、現代日本を近代日本という「鏡」を通して考察する場も提供している。

二十一世紀の現在、日本が国際化の時代に入ったといわれて既に久しいが、考えてみれば、近代以降の日本の歩みも一面において「国際化」の歩みそのものである。国際化が進めばそれに対する反動も見られるが、その動き（それがどの程度効果があるかはさておき）はこの時期にも見られる。研究会のテーマに沿っていえば、19世紀末からの世界的な民族自立の動き、一種の社会的な革命の潮流を受け入れようとする立場と、それに対する反動を推進する立場は、同時代に平

行して存在している。また、一人の人間の中にこの二つの立場が混在し、時代や状況の変化によって、その人物の立場が180度変わったように見える場合もある。それが、中国における革命的動向とアメリカの極東への介入という事態によって、複雑な相互作用を引き起こした。2005年の日本には、まさにこれと同じことが、東アジア共同体構想をめぐって、また中国における反日運動などをめぐって生じたことは、記憶に新しい。

しかし、それも今も昔も変わらず繰り返されてきたことである。こう考えると、歴史研究は、現代の事象をある意味での「距離感」を持って考察する態度を養成する手段でもあるように思う。実は、近代の歴史をみても、広い意味での「国際化」が進展し、変化を余儀なくされた時代には、「歴史」に対する関心が高まっていることに気付く。その中には、知的誠実さが微塵も見られない他国批判や自国賛美、果ては陰謀史観に墮する「ジャンク・ヒストリー」も多い。それもまた今も昔も変わらないのであるが、今現在の変化がもたらすだろう「将来イメージ」を、過去の事例から探ろうとする心境もまた、普遍的な傾向なのかもしれない。

そのことは、非常勤の時代を含めて三年目になる私の日本政治史の講義でも感じることである。私は、短い経験ながら、年を追うごとに学生の「歴史への関心」が強まっていると感じている。

例えば、今年は戦後60年であり、その関係で、1945年9月2日、すなわち降伏文書調印式の日の朝日新聞の社説を学生に読ませてみた。そして、当時の日本の状態をどのように想像するか、そして、この社説ではどのような戦後の見通しを立てていたか、それに対して自分がどう思うか、という感想を書かせてみた。その社説とは以下のようなものである。長くなるが、話の都合上、その一部を引用しておきたい。

「我國外交の再出発」(1945年9月2日付朝日新聞社説)

我國の國際的地位は激変した。これについては多くを語るを要しない。暫定的ではあつても、國家主権は外力による制約下に置かれ國際機関への参加、諸外國との國交關係の維持などあらゆる外交手段は停止せざるを得ない一事を指摘すれば足りよう。ここに我國外交は、卒然として、過去の基盤を喪失し、必然的に新たな出発点に立たされたのである。近来における、我國外交の無定見、無施策、無理想が、遂に我國をして今回の破局へ投げしめたことを想えば、この歳を逸して我國外交の全体的な建直し不可能である。またこれなくして、日本再建を語ることは全く無意義とならう。

しかし、外交の建直しは、いふべくして行ひ難い事業である。それは、外交が國家存立の目標と方向、一國の政治の性格と本質に相關する國家の最高綜合的な機能に屬する問題だからである。もとより一外交當局だけの問題ではない。しからば我國今日の政治活動の低迷、思想的混沌、國民の虚無的感情の基盤の上に、何からこの問題に手を下すべきであらうか。まことに前途の多難を思はざるを得ない。だが翻つて脚下を見れば既に聯合軍の最高司令官とその部隊は本土に上陸し、我國との折衝は開始された。しかしこの聯合軍との接觸こそは、今後幾年か我國の運命を左右する最大の要因であり、これのみが我國に許された對外活動の一路である(中略)。

そこには當然日本自身の自主的な主張と態度とが存しなければならない。もしかかる主張と態度とが欠如してゐる場合には我外務當局の仕事と役割は、一介の通訳、貿易に歸する危険なしとしないのである。それでは日本の再建の路を拓き日本の新たな進路を決することは不可能となるのみならず、かへつて聯合軍の嘲笑を買ひ、眞の日米協力の途も閉されるのである。

だが、日本の自主的態度とは何か、また如何にして生まれるものであらうか。今や思想、政治、外交の大転換期にある。この際旧來の無批判な獨善的、固陋な思想をもつて、日本の自主的態度といひ得ないことはいふまでもない。今後日本の内治、外交の指針となり得るものは、戦後國際政治並びに我國內政治の動向に対する鋭敏なる理解と認識の上に打樹てられた日本の新しい世界政策でなければならぬと信ぜられる。たとひ我國が、現在外交的封鎖の時期にあるとはいへ、これなくして明日、世界政治への進出はなし得ないのみならず、今日、聯合軍との折衝においても日本の立場を擁護し、主張することはできないのである。この疾風怒濤の時代に、外交とはも早や技術的問題ではなく、一國の世界政策、信念、理想の問題である。そこには、廣き視野、確固たる信念、高き政治的教養が必要とされ、旧來の官僚的、技術官的視野と教養が入込み得る隙は

ないのである。やがて我國にも激しい政治的胎動の時期が訪れるであらう。しかも外からは、聯合各國政策と要求が容赦なく我國を締め上げるであらう。この時、休眠暇死に状態にあるかに見える國民卒伍の間から、如何なる外交への熾烈な要望が生まれるかも知れない。我が外務當局が、今日、この過去の反省を怠り、現在の平穩に狸れ、依然として官僚的技術官の態度を越え得ないならば、國民の手によって斧鉞が加へられんとも限らない。外務當局の出處進退の公明、思想の鍛錬、政治的教養の練磨を強く要望する次第である。

学生にはなかなか難解な文章であろうが、学生に書かせたミニレポートには、以下のような意見があった。

- ・当時の日本は「絶望」といってよい状態にあったのだろう。また、当時の日本は新しいが「重苦しいスタート」を切ったと思うし、「大きな不安」と「小さな希望」が綱交ぜになっていたのではないか。
- ・「国の再建」に向けての力強さを感じる。
- ・この段階での「外交」というものへの着目に驚く＝「外交とはもはや技術的問題ではない」という言葉に感銘を受けた。
- ・このときの日本の再建とはつまりは「外交の建て直し」のことであると思った。
- ・ここには、戦時期の外交に対する不満の爆発があるのではないか。
- ・日本は、このときから国際社会と同じテーブルにたって話し合いができるような国になろうとしたのではないか。

なかなか鋭い着眼もあり、また誤解もあるが、このような多様で力のこもった意見が出された理由は明らかである。それは、この社説が、時代状況を別にすれば、まさに現在に通じるような主張をしているからである。変化の時代にまず問題にされるのは、われわれが向かうべき方向性である。それはまさに「技術的」なものではないところの、定見や施策や理想を背景とした国家の総合的機能の発揮としての「外交」が定めるべきものに他ならない。それは60年の時代を超えて、今に通じるテーマである。

将来を思い描こうとするとき、人は往々にして歴史にそのヒントを得ようとする。景気が回復したとはいえ、多くの不安を抱える学生達も、自分の立ち位置と進むべき道を、日本の歴史に重ね合わせて、見定めようとしているのだ。

このようなことをつらつら考えていると、有無を言わせぬ「国際化＝変化」と剥き出しの「反動」との間を上手に調整する役目を果たすのは、歴史への関心、そして、それを通して得られた「歴史感覚」なのではないかという、やや大胆な思い付きが頭をよぎる。少なくとも、「天が下に新しきものなし」という感覚は、変化の時代における個人の不安を和らげ、社会を安定させる一役を担うのではないかと思う。

そして恐らく、近代以降の日本に総体的に欠如しているのは、そのような「歴史」であり、「感覚」であり、「言論」であるのではないかと、2005年の本グループの活動を通して感じ始めている。焦燥感の中で改革を進めたばかりに、戦前の日本は結局国を誤ったことを忘れてはなるまい。これからの日本にどのような言論が立ち現れるか、興味津々である。(2006年1月25日記)